

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目  
氏 名

大学時代の正課外活動と社会人生活との関連に関する研究 －「体育会系は就職に有利」という言説に着目して－
--

金森 史枝
-------

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、「体育会系は就職に有利」という言説を分析枠組みとして、大学の正課外活動（特に体育会系）を通して学生がどのような能力を培っているのか、また、大学時代の正課外活動の取り組みは就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのかという点を明らかにし、体育会系とそれ以外の者との比較検討から高等教育における正課外活動の意義についても検討することである。なお、本論文において「体育会系は就職に有利」という場合の「就職」については、採用のみならず就職後の昇進・昇格等を含める。

本論文は序章、第1章から第5章、終章から成る。以下、各章の概要を示す。

序章では、本論文の背景と目的を述べた。「体育会系は就職に有利」という言説がある。体育会系出身者は体力があり人間関係構築力や忍耐力を有し、上下関係などの礼儀を身に付けた企業の中で活躍できる人材としてこれまで一般的に評価を得てきた。しかし、時代の変化と共に労働市場が変化し体育会系人材への評価も変化している可能性が考えられる。「体育会系は就職に有利」という言説はあくまで一般的に言われているに過ぎず、体育会系のどのような能力が就職に有利なのかという点に着目した研究の蓄積はあまり見当たらない。そこで、現在の体育会系は大学の正課外活動を通してどのような能力を培っているのか、そして、労働市場で活躍できているのかという観点から研究課題を設定し、大学生及び社会人を対象に複数の調査研究を行う。

第1章では、先行研究の検討を行った。体育会系就職は大正から昭和の高度成長

期において体力があり快活な性格などが当時の「男性中心社会」の戦力となる大卒労働力として企業から求められた。しかし、近年企業は「自律型人材」「イノベーション人材」を重視する傾向にあり、この状況変化に体育会系人材が適応できているかは不明である。そこで、「正課外活動（特に体育会系）を通してどのような能力を培っているのか」、「大学時代の正課外活動の取り組みが就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのか」の2つのリサーチクエスチョン（RQ）を設定して明らかにすることとした。

第2章では、前章で近年企業は自律型人材を求めるようになってきたことを把握したが、それでは現在大学生は一般的にどのような特性を有しているのかについて分析した。まず、「何事もほどほどに」に重点を置いて大学生活を送る学生が漸次増加している（1982年の14.6%から2010年には21.5%）ことに着目して量的研究を行った。その結果、大学生活の過ごし方の選択肢から「何事もほどほどに」を選択した学生には、「何事も<適当>に過ごすというネガティブな学生」に加えて、「何事も<適度>に活動的なポジティブな学生」が含まれていることが明らかとなった。次に、「何事もほどほどに」大学生活を過ごす人が増えていることについて大学生はどのような認識を持っているか自由記述回答（412名）をもとに質的研究を行った。その結果、現役大学生の半数以上が「何事もほどほどに」大学生活を過ごすことについて「ネガティブ志向＝非主体的」とカテゴリー分類された項目に該当する回答をし、それは「主体的になれない態度」という特性として析出された。これらの分析から企業が求める人材と一部の現役大学生の特性には乖離のあることが示された。

第3章では、まず、現役大学生で体育会運動部所属者（412名）を対象にその特性を明らかにするため量的研究を行った。その結果、体育会運動部に所属して勉強もしっかりと取り組んでいる者が67%を占め、アルバイト経験者は83%、さらに、他のクラブ・サークル等にも所属している者は21%を占めることが明らかとなった。このことから、体育会運動部の所属学生の一部に、「何事も<適度>に活動的なポジティブな学生」が含まれていることが示唆された。次に、「体育会運動部活動で習得していること」について自由記述回答（318名対象）をもとに質的研究を行った。その結果、「人間関係・上下関係・礼儀作法」「チームワーク・協調性・仲間」の対人関係に関することと、「体力・競技技術」「努力・忍耐力・精神力」「社会性・教養・経験」「人間形成・思考力」「主体性・リーダーシップ」「コミュニケーション力」にそれぞれ分類される内容が示された。これらにはいわゆる非認知能力も含まれている。さらに、幼少期から継続してスポーツに取り組む、現在も体育会運動部に所属しているある医学部学生へのインタビューデータをもとに質的研究を行った。そして、スポーツ活動と勉強との両立の葛藤とその克服を繰り返しながら精進して主体的な大学生活を送る「文武両道の主体的学生モデル」を提示した。

第4章では、社会人を対象に大学時代の正課外活動の違いが社会人生活に及ぼす影響について量的研究を行った。まず、大学時代に正課外活動として体育会運動部、体育系サークルに所属していた社会人男女各200名(合計400名)を対象に「所属」と「勉強との両立」を独立変数、社会人としての仕事の取り組み状況(16項目)と自覚的能力項目(6項目)の得点を従属変数とした二要因分散分析を行った。その結果、男性の体育会運動部所属者は体育系サークル所属者と比較して、全般的に「勉強との両立」が規定要因となる傾向にあることが明らかとなった。次に、対象を体育会運動部、体育系サークル、文化部、文化系サークルに所属していた社会人男女各300名(合計600名)に拡大して同様の分析を行った。その結果、男性では、「勉強と両立」していた体育会運動部所属者は最高得点の項目が多く、一方、女性では「勉強と両立」していた文化系所属者にも得点の高い項目があり、男性に比べ所属の影響は小さかった。さらに、大学時代の正課外活動の所属を体育会系、文化系、他の取り組み、何もせずの4区分に設定し、社会人男女各400名(合計800名)のデータを用いて、所属の違いが社会人生活における仕事の充実度やワークライフバランスにどのような影響を及ぼすのかについて量的研究を行った。このうち①「大学時代の過ごし方と現在の自覚的能力について肯定回答比率を対比較した分析」では、男性の体育会系所属者は大学時代の過ごし方及び現在の自覚的能力について他群と比較して顕著に高い値を示した。このことから男性の体育会系所属者はポジティブな大学生活を過ごし現在の自覚的能力も高いと認識する傾向にあることが明らかとなった。一方、女性は文化系と体育会系に分散して高い値を示した。また、他の取り組みを行っていた者及び何もしていなかった者は相対的に低い率に留まっており、大学時代の正課外活動である体育会系及び文化系の活動への参加が社会人生活へ大きな影響を与えていると推察された。また、社会人である現在の意識について、所属の違いと年齢の影響を除去した条件による②「社会人である現在の意識と大学時代の過ごし方についてのロジスティック回帰分析」からは、男女とも大学時代に前向きな就職活動を行ったか否かが現在の仕事の充実度と関連していることが示唆された。そして、大学時代に正課外活動として必ずしも体育会系などの部活動に所属しなくても社会人として必要な能力を涵養できるが、それらを一つの活動で得ようとするには体育会系または文化系の正課外活動がその場となっていることが推察され、学生にとって正課外活動への参加は社会人として求められる多様な力を培う重要な機会につながることを具体的にデータで示した。

第5章では、本論文で実施した9つの実証研究の結果を踏まえて総合考察を行った。まず、各章ごとの総括を行い、次に、RQについて考察した。大学時代の正課外活動の所属の違いによる分析から、体育会系や文化系の取り組みは就職や社会人生活の各項目や自覚的能力にプラスに影響していることが明らかとなった。また、大学時代に「どんなことでも何でも頑張った」、「できるだけ多くの人と交流しよう

としていた」者は、特に男性では自覚的能力が高く社会人生活をポジティブに送る要因であることが示唆された。また、分析枠組みとして用いた「体育会系は就職に有利」という言説から考察を行った。たしかに、現在でも特に男性については「体育会系は就職に有利」であるといえる。しかし、正課外活動の所属の違い（体育会運動部、体育系サークル、文化部、文化系サークル）によらず同じ所属であれば、体育会系に限らず「勉強との両立」が社会人生活と自覚的能力について全般的によりポジティブな意識を持つことに関係している結果が示された。このことから大学生活において勉強やその他の大学生活の活動とも「バランス」が取れる部活動のあり方が問われることを論じた。その上で、「高等教育における正課外活動の意義」を考察した。新卒一括採用のあり方や働き方改革に伴う雇用社会の変革期にある現在、大学にはこれからの新たな社会で活躍できる能力を備えた人材の育成が求められる。しかし、現在の高等教育において正課教育だけでは社会から求められる能力への対応が難しいところがあり、第2章で企業が求める人材と一部の現役大学生の特性には乖離のあることは確認したとおりである。一方で、正課外活動は学生の自主的な取り組みに任せているため参加する学生は一部に留まり、取り組みにより得られる能力にも差が生じるという課題がある。高等教育における正課外活動のあるべき姿として、正課教育と正課外活動、さらにそれ以外の取り組みの創設を含めて多角的な教育プログラムを用意することなどを具体的に検討した。最後に、「高等教育とスポーツの取り組み」についてまとめた。本論文では体育会系に限らず大学時代にスポーツ活動に取り組んで体を鍛えていたことが、社会人である現在におけるスポーツ実施に影響を与えていることが示唆された。さらに、社会人として現在スポーツをしていることと仕事の取り組み状況との間にプラスの関係が分析結果から示された。これらの結果を踏まえ、高等教育において体育会系などの正課外活動への参加の促進に加え、正課教育等の教育課程においてもスポーツの多様なカリキュラムの配列が検討されるべきことを提言した。

終章では、得られた知見を整理して本論文を総括した。本論文では、大学時代の正課外活動として体育会系及び文化系の活動への参加は社会人生活に大きくプラスの影響を与えていることをデータ分析で実証し、高等教育における正課外活動の意義を提示した。今後の課題として、今回は大学時代の属性から主として分析したが、幼少期から大学までのスポーツ経験やその他の取り組みが大学時代の正課外活動やその後の社会人生活に影響していることも考えられることから、この点についていっそうの調査分析が必要である。